

第四十節の隠された歴史 — 第三十一番

エゼキエル 第十二章

Jeff Pippenger

2026-09-20

前回の記事は、次の一節をもって結ばれていた。「313年の条約婚姻は、黙示録第十七章の十人の王の筆頭の王であり、フランスの二本の角を持つ権勢によって予表される二本の角を持つ権勢である合衆国と、教皇権との最終的な条約婚姻を表している。496年のクロヴィスに始まり、最終的には533年のユスティニアヌスの勅令と538年の教皇権の即位へと至った歴史は、1989年から日曜法に至るまでの歴史を表している。」

ロナルド・レーガンは496年のクロヴィスによって予表されており、ドナルド・トランプは533年のユスティニアヌスによって予表されている。ユスティニアヌスの勅令は、538年に教皇制が王座に上る五年前に発せられ、またミラノ勅令は、321年の最初の日曜法の八年前に出された。これらの勅令はいずれも、日曜法に先行する道標として符合している。

レーガン

1870年、イタリア軍はローマを占領した（1870年9月20日）。教皇領は領土国家として存在をやめ、教皇ピウス九世は「ヴァチカンの囚人」となった。主権国家として承認される教皇領がもはや存在しなくなったため、アメリカ合衆国は（他の多くの国々と同様に）、もはや世俗的支配者としての教皇との正式な外交関係を維持しなかった。1951年10月、ハリー・S・トルーマン大統領は、マーク・W・クラーク将軍をヴァチカン駐在米国大使に指名した。これに対し、多くのプロテスタント教会および団体から、当該任命は政教分離に違反するものであるとして、強い反対がたちまち起こった。1952年1月、クラーク将軍は指名を辞退した。

1984年1月10日、ロナルド・レーガン大統領と教皇ヨハネ・パウロ二世は、アメリカ合衆国とローマ教皇庁との間に完全な外交関係を樹立することに正式に合意した。1984年4月9日、ウィリアム・A・ウィルソン（すでにレーガン大統領の個人代表を務めていた）は信任状を捧呈し、アメリカ合衆国初の駐ローマ教皇庁大使となった。

1951年から1984年までの三十三年間のうちに、カトリックに対するプロテスタンティズムの抵抗は消え失せた。496年にクロヴィスとともに教皇制のために立った「武力」は、1984年から1989年に至るまでのレーガンを予表している。クロヴィスは、教皇制が再び権力の座へと台頭するのを妨げていた宗教（異教主義）が取り除かれることを表しており、1984年までには、教皇制の台頭に対するプロテスタンティズムの抵抗は取り去られていた。「常供のもの」（異教主義）は取り除かれており、パウロは、異教主義の教皇制に対する抵抗が取り除かれるそのことを、「離反」と述べている。

コンスタンティヌス大帝によって表され、また313年から538年までの歴史によって表される妥協の象徴的教会は、教会が自ら妥協し、背教した時代を示していた。かつて教皇権

力の侵入を抑制していた「508」によって表される宗教は、アメリカ合衆国におけるプロテスタントの背教を予表していた。レーガンはクローヴィスによって表されていた。496年にクローヴィスはその「力」を教皇制に与え、それによってレーガン時代に成就した「不聖な同盟」を予表した。クローヴィスはまた、508年における「日ごとの供え物」の取り除きをも表していた。508年は1984年を予表していた。

「異教主義とキリスト教とのこの妥協は、預言の中で神に敵対し、自らを神の上に高く上げる者として予告されていた『罪の人』の発展をもたらした。この巨大な偽宗教の体系は、サタンの力の傑作であり、自らの意志に従って地を支配するために王座に着こうとする彼の企ての記念碑である。」『各時代の争闘』50頁

レーガンは、1983年の演説においてソビエト連邦を「悪の帝国」として広く知られるかたちで呼び、無神論的共産主義を深刻な道徳的・霊的脅威とみなしていた。彼とヨハネ・パウロ二世は、ソビエト共産主義に対抗するうえで、緊密な個人的かつ政治的な協力関係を築いた。両者はこの闘争を道徳的な、さらには摂理的な観点からさえ捉えており、レーガンは私的には、共産主義を打倒するための「神の計画」について語っていた。レーガンはファティマの出現（「ロシアはその誤謬を広めるであろう」との警告）に関心を寄せており、またこの二人の指導者は、神が自分たちの命を救われたのは（両者とも1981年の暗殺未遂を生き延びた）共産主義の打倒に関わるある目的のためであった、という共通の認識について語り合っていた。

キリストの弟子たち

レーガンは、創立者たちがローマ・カトリックの教皇こそ反キリストであると明確に教えていたキリストの弟子派（Disciples of Christ）で育てられた。キリストの弟子派教会の最も著名な初期指導者であったアレクサンダー・キャンベルは、教皇制を反キリストとして繰り返し特定した。彼は討論や著作において、ダニエル書7章の小さな角、黙示録13章の獣、そしてテサロニケ人への第二の手紙2章の不法の者は、いずれもローマの教皇たちを指し示していると論じた。彼はこれらの同定を公の討論の場でも用いた（1837年に行われたカトリック司教ジョン・B・パーセルとの討論を含む）。バートン・W・ストーンは、教皇の統治を真の反キリスト、また「不法の者」と呼んだ。ウォルター・スコット（この運動のもう一人の初期の伝道者）もまた、不法の者、すなわちローマの教皇はキリスト教会の中に現れ、自らを神の上に高く上げるであろうと書いた。

レーガンの母ネルは、キリストの弟子派（Disciples of Christ）の敬虔な信徒であり、彼の幼少期における宗教的影響の中心的存在であった。レーガンは11歳のとき、イリノイ州ディクソンのキリストの弟子派の教会で洗礼を受け、十代のころにはそこで活発に活動し（主日学校で教えることも含まれていた）、キリストの弟子派と提携関係にあったユーレカ・カレッジに通った。

「御言葉の理解において混乱し、反キリストの意味を見分けることのできない者たちは、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。今、私たちにはこの世と同化する時間はない。」Kress Collection, 105.

レーガンは、クローヴィス、また大コンスタンティヌスの妥協によっても予表されていた。レーガンはまた、1989年の終わりの時以来の最後の八人の大統領の最初の一人でもあった。最後の八人の大統領の最初の者として、彼はドナルド・トランプを予表している。トランプは、レーガンと同様に、教皇制の真の目的と、教皇制が何者であるかについて、深く混乱している。

ふたりの者が、互いに申し合わせることなくして、ともに歩むことができようか。アモス書 3:3.

ダニエル書第十一章における第六かつ最後の条約婚姻は、1989年の終わりの時に始まる歴史の中で生じ、ドナルド・トランプの歴史において終結する。

「現在、アメリカ合衆国において、教会の制度および慣習に国家の支持を確保しようとして進行中の諸運動において、プロテスタントはローマ教徒の歩みに従っている。いや、それ以上に、彼らは、旧世界において失った至上権を、教皇制がプロテスタント・アメリカにおいて回復するための門を開いているのである。」『各時代の大争闘』573頁.

313年の婚姻条約とミラノ勅令は533年の歴史と符合しており、533年におけるユスティニアヌスの勅令は、もはや教皇権力をキリスト教的制度として同定することが、よく言っても自己矛盾であり、悪くすれば致命的な惑わしであることを理解しない、自称キリスト教的な政権によって、再び施行されることになる。

教会と国家

紀元前457年、アルタクセルクセスの第三の勅令は、政治的権威と宗教的権威の双方における国家主権を回復した。

そして、あなたエズラよ、あなたの手にあるあなたの神の知恵に従って、川の向こうにいるすべての民、すなわちあなたの神の律法を知るすべての者を裁くために、長官と裁判官を任命せよ。また、それを知らない者には、あなたがたが教えよ。だれでも、あなたの神の律法と王の法とを行わない者には、死刑であれ、追放であれ、財産の没収であれ、投獄であれ、速やかにその者に対して裁きを執行せよ。エズラ記 7:25, 26.

第三の勅令は、神の律法と王の法との双方に関して、裁きと処罰を執行する権威を付与した。その勅令は、二千三百年の預言の始まりを画し、その預言は、キリストが突如として御自身の宮に来られた一八四四年十月二十二日に終結した。またそれは、紀元前二一七年のラフィアの戦いと紀元前二〇〇年のパニウムの戦いとの間の歴史において、紀元前二〇七年に終わった二百五十年の預言の始まりをも画した。紀元前四五七年における市民のおよび宗教的主権の双方の回復は、二重のアルファを示しており、それは二つのオメガ的成就を見いだす。これら二つのオメガ的成就はいずれも閉ざされた門を表しており、一つはプロテスタントの角のためであり、もう一つは共和主義の角のためである。

二千三百年の最初の預言は神の律法を表し、二百五十年の預言は王の法を表していた。これら二つの預言は、黙示録十三章の地の獣の上にあるプロテスタンティズムの角と共和

主義の角とを特定する。地の獣の共和主義の角は、ダニエル十一章十一節から十六節の中間に置かれている。ラフィアとパニウムとの間の十七年間は、紀元前457年の第三の勅令に関する二重の預言から出る一つの角によって交差される。この二重の預言は、最終時代の契約の民の裁きと、またその契約の民がその根を見いだす国の裁きとの両方を明らかにする。

そして主はアブラムに言われた。あなたは、このことを確かに知っていなければならない。あなたの子孫は自分たちのものではない地で寄留者となり、その地の民に仕え、彼らは四百年の間、あなたの子孫を苦しめるであろう。しかし、彼らが仕えるその国民を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産を携えて出て来るであろう。創世記 15:13, 14.

エゼキエル書において、1844年10月22日は、紀元前573年10月22日より予表されている。一方の年日は調査審判の開始を示し、他方の年日は、その審判の過程の初めと終わりの双方におけるヨベルの角笛の吹奏を示している。両者の年日は一致しており、またいずれも閉ざされた門を示している。1844年は、キリストが至聖所へ移られた時の聖所の戸の閉鎖を表している。紀元前573年は、人類の恩恵期間の終結を示しており、その時、贖われた罪の奴隷たちは自由を与えられ、住まうべき新しい地を与えられるのである。

もし彼がこれらの年のうちに買い戻されないなら、ヨベルの年に、彼も、彼と共にいるその子らも、出て行くのである。イスラエルの子らは、わたしに属するしもべである。彼らは、わたしがエジプトの地から導き出した、わたしのしもべである。わたしはあなたがたの神、主である。レビ記 25:54, 55.

二つの10月22日は、間近に迫った日曜休業法の閉ざされた戸を表している。アドベンチズムに与えられた恩恵期間は1844年に始まり、間近に迫った日曜休業法をもって終わる。また、アメリカ合衆国に与えられた恩恵期間も、同じく間近に迫った日曜休業法をもって終わる。これら二つの終結は、2,300年と250年という二つの証人としての10月22日と一致している。

ラフィアとパニウムとの間の歴史において終わる二百五十年は、二つの戦いの期間を二つの象徴的な数に分けており、それらは共にそれ自体の特異な意味を有している。すなわち、ラフィアの十年後——その名は「境界の地」を意味し——かつ、平原において戦われ、包囲戦によって終結した戦いであったパニウムの七年前である。十と七は、いくつかの証言において竜の権力を示す象徴としてそれを同定する。紀元前二〇七年は、地の獣の象徴であるトランプを、ダニエル書十一章十一節と十五節の間に置き、預言的に竜のように語る備えをさせるのであり、それは十という数と七という数の結合によって表されている。

十七もまた象徴的であり、それはラフィアからパニウムに至る歴史を、パニウム以後にまで、またラフィア以前にまで拡張している。プトレマイオス朝エジプトの王プトレマイオス四世フィロパトルは、紀元前221年から紀元前204年まで統治し、紀元前217年のラフィアにおいてアンティオコス・マグヌスを打ち破った。プトレマイオスはラフィア以前に統治を開始し、彼は「十七」年間統治した。十七という数は、ラフィア以前に始まり、パニウムの戦いとシドン包囲を越えて、330年によって表象される人間の恩恵期間の終結に

まで及ぶ歴史的期間を表している。スミルナの教会の期間に対する二百五十年の預言は64年に始まり、313年のミラノ勅令と婚姻条約において終わった。

大コンスタンティヌスはペルガモの教会の歴史を表しており、その歴史は313年に始まり、538年に終わった。313年に二百五十年の預言が終結した後の最初の「十七」年間には、三つの道標が存在する。313年はミラノ勅令、321年は最初の日曜休業法であり、帝国の分割は330年において示される。330年は、人類の恩恵期間の終結を画する最終の日曜休業法を表している。したがって、十七という数はラフィア以前に始まり、パニウムおよびシドンの軍事遠征のはるか後に終わる。ダニエル書11章16節は、アメリカ合衆国における日曜休業法を表している。

スミルナの預言は、エゼキエルの警告の使命のまさに核心である包囲のしるしを明示している。エルサレムの滅亡を示す二つの例証によって表される、日曜休業令に先立つ道しるべは、その包囲であるが、同時にまた、獣の像の形成を開始するミラノ勅令でもある。

包囲において、一つの条約的婚姻行列が生起するであろう。それは、496年のクロヴィスによって予型されたように、レーガンをもって始まった婚姻行列のフラクタルである。しかし、婚姻へと至る最終的な行列は、533年のユスティニアヌスの勅令、および313年のミラノ勅令と整合しつつ、包囲において始まる。これら二つの道標はいずれも日曜法に先行する。313年は321年の最初の日曜法に先立ち、533年の勅令は538年の第3オルレアン公会議における日曜法に先立った。何らかの立法が、ユスティニアヌスの勅令とミラノ勅令の双方の預言的特徴を成就し、同時に、何らかの象徴的な条約的婚姻が打ち立てられるであろう。

その布告がなされる時には、備えを整えるにはすでに遅すぎる。なぜなら、試みの期間の扉は、エジプトにおける最初の過越の時に閉ざされたのと同様に、確かにプロテスタントの角に対して閉ざされるからである。その後、次の道標である日曜法は、獣の像が完全に形成されたことを示すだけでなく、獣の刻印の強制執行をも示す。日曜法は、黙示録十三章の地の獣である共和党の角にとっての試みの期間の終わりを画する。それは、過越の後にパロとその軍勢が紅海で死んだのと同様に確かなことである。

紀元前207年に終結する二百五十年は、パニウムの平原で始まりシドン包囲で終わる来たるべき遠征に備えるアンティオコス大王によって象徴されるものとして、ドナルド・トランプを示している。パニウムの戦いの後、プトレマイオス朝の将軍アイトリアのスコパスは、生き残った約一万の兵を率いてシドンの町へ逃れた。アンティオコスはこれを追撃し、シドンを「包囲」した。アレクサンドリアのプトレマイオス朝政府は救援軍を派遣したが、成功しなかった。飢餓に直面して、スコパスはその町を明け渡した。アンティオコスはスコパスの退去を許した。スコパスは後にエジプトへ戻ったが、そこで最終的に反逆および横領の罪で処刑された。シドン包囲は、パニウム以後のアンティオコスによるコイレ・シリア征服を完了させた。

ホワイト姉妹は、ウリア・スミスの著書『Daniel and the Revelation』を「神の助けの御手」と位置づけている。スミスは、ダニエル書第十一章十四節および十五節の注解において、アンティオコスの二段階にわたる遠征を示している。

「エジプトの若き王の教育は、ローマ元老院によって M. Emilius Lepidus に委ねられ、彼はその宮廷の老練にして経験豊かな大臣アリストメネスを後見人に任命した。彼の最初の行為は、同盟を結んだ二人の王、ピリポとアンティオコスによる差し迫った侵攻に備えることであった。

この目的のために、彼は、当時エジプト人に仕えていたアエトリアの名将スコパスを、その本国に援軍を募るべく派遣した。軍勢を整えると、彼はパレスチナおよびコイレ・シリアへ進軍し（そのころアンティオコスは小アジアにおいてアッタロスとの戦争に従事していた）、ユダヤ全土をエジプトの支配権に服属させた。

「このようにして、われわれの前にあるこの節の成就のために、事態は整えられた。すなわちアンティオコスは、ローマ人の命令によってアッタロスとの戦争を中止し、パレスチナおよびコイレ・シリアをエジプト人の手から奪回するため、迅速に行動を起こした。これに対抗するため、スコパスが派遣された。ヨルダン川の水源近くで、両軍は会戦した。〔パニウム〕スコパスは敗北し、シドンまで追撃され、そこで嚴重に包囲された。エジプトの最も有能な將軍三人が、その精鋭部隊とともに包囲を解くために派遣されたが、成功しなかった。ついにスコパスは、痩せ衰えた、しかも実体をとらえがたい飢饉という亡霊のうちに、自らの対抗しえない敵と遭遇し、不名誉にも命だけを助けられるという条件で降伏を余儀なくされた。その結果、彼とその一万人の兵士たちは、衣服をはぎ取られ、裸のままで立ち去ることを許された。ここに、北の王による最も堅固な諸都市の攻略があった。というのも、シドンは、その立地と防備の両面において、当時最も強固な都市の一つであったからである。ここに、南の軍勢が持ちこたえることの失敗があり、また南の王が選んだ民、すなわちスコパスとそのアイトリア軍もまた失敗したのである。」『Daniel and the Revelation』257、258頁。

紀元前207年に終結する二百五十年は、ドナルド・トランプを指し示している。東西の条約婚姻およびミラノ勅令によって313年に終わる二百五十年の預言は、合衆国における獣の像の形成を示している。313年に始まったペルガモの教会は、教皇権が王座に就くに先立ち、キリスト教が異教の宗教との妥協を通して墮落した歴史を表している。ペルガモと313年は、合衆国における獣の像の形成によって表される妥協を予表している。それはキリスト教と教皇制ローマとの妥協を表している。というのも、カトリックの宗教とは、キリスト教的制度として装われた異教にほかならないからである。1776年に始まり今年終わる二百五十年の預言もまた、合衆国を扱っている。したがって、三つの二百五十年の預言はすべて、黙示録13章の地の獣の何らかの預言的側面を扱っており、また三つすべてが、十七という数字によって表される預言の線の内側で終結するのである。

日曜法とは、合衆国が竜として語る時のことであり、国家が語ることは、その立法および司法当局の行為を意味する。

「その国の『語ること』とは、その立法機関および司法機関の行為である。」『各時代の大争闘』442頁。

トランプは司法権威でも立法権威でもないので、まもなく到来する日曜法は議会によって成立する。とはいえ、教皇権を支持するいかなる行為も、日曜法を予表する。533年の勅令と313年の布告は、獣の像が形成される期間の始まりを示している。結末はまもなく到

来する日曜法であり、イエスは常に終わりを始まりによって例示されるので、聖書預言の反キリストに何らかの「譲歩」を与えることになる大統領令を通したトランプの行為は、その運動のアルファを表すことになる。その運動は、合衆国が「その政府の原則をかくも放棄して日曜法を制定する」に至るオメガにおいてのみ終結するのである。

「日曜遵守の強制を求めるこの運動に携わっている者たちの中にも、その行為の結果として何が生じるかについて目がくらまされている者が多い。彼らは、自分たちが宗教の自由そのものを真正面から打ち砕こうとしていることを見ていない。聖書の安息日の要求と、日曜日制度がその上に立つ偽りの土台とを、いまだ理解したことのない者が多いのである。宗教立法を支持するいかなる運動も、実際には、非常に長い時代にわたって良心の自由に対して絶えず戦いを挑んできた教皇制への譲歩の行為である。日曜遵守は、いわゆるキリスト教的制度として、その存在を『不法の奥義』に負っている。そして、その強制は、まさにローマ主義の礎石そのものである諸原理を、事実上承認することになる。わが国が、その政府の諸原則をこのように放棄して日曜法を制定するならば、プロテスタント主義はこの行為において教皇制度と手を結ぶことになる。それは、長きにわたって再び活発な専制政治へと跳びかかる機会を貪欲にうかがってきた暴虐に、命を与えることにほかならない。」『Testimonies』第5巻、711

「宗教立法を支持するいかなる運動も、実際には教皇制への譲歩の行為である」。そして、そのような運動は、やがて到来する日曜法に先立って生じる。

「この日を礼拝することを強制する布告は、全世界に向かって発せられることになっている。限られた程度においては、それはすでに発せられている。いくつかの場所では、異教の王がヘブル人の捕囚たちに語ったのと同じように、国家権力が竜の声をもって語っている。」『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』1897年5月6日。

これらの事柄については、次の記事で引き続き扱うことにする。